＝市史編さん便り＝【47 号】令和 5 年 11 月 9 日(木)発行
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊土佐清水市教育委員会・市史編さん室

「土佐清水市史編さん事業」開始の発端

平成 30 年 3 月市議会において、市議会議員武藤清氏（当時）の「『土佐清水市史』発刊から 38 年、そろそろ改訂を！」との議会質問に端を発し、市史改訂の流れが一気に加速して始動したのが翌年度（平成 30 年度）末からであった。

武藤氏は、土佐清水市郷土史同好会(以下郷土史同好会と記す)に所属し、その関係から昭和 55 年発行『土佐清水市史』（次より『旧市史』と記す）の「近現代史」を執筆した中村春利先生（元郷土史同好会会長、元清水小学校校長）とも親しく、市史改訂のことを折に触れて話す機会があった。「自分が書いた近現代史が教職の傍らの取り組みであり納得できる内容でなかったこと」「これを改訂し、新たな研究成果と知見を持って書き換えてほしいこと」を中村先生は、その思いを度々武藤氏に語った。

（１）市議会で市史改訂を市長に投げかけ、市長もこれに呼応

その後、武藤氏は逝去した中村先生の遺志を受け、新たな市史編さん事業の開始を市議会で市長に投げかけた。

まさに機が熟したとはこのことだろう。泥谷光信市長（当時）は、これを真正面から受け、平成 30 年度から生涯学習課に市史編さんの準備を指示した。生涯学習課では、県内外の市史刊行の動向やその取り組み等の視察や聞き取り、市史編さん条例・規則の制定、編集及び印刷製本の委託事業者入札等を精力的に進めた。翌平成 31 年度（5 月 1 日より令和元年度）4 月 1 日付けで生涯学習課に市史編さん室を設置し、室長と係長を置き、本格的に市史編さん事業が開始されることになった（令和 2 年 10 月より一名職員を増員)。奇しくも『旧市史』刊行に関わり、中心的役割を果たした中山進氏の補助的業務を行った武藤清氏・泥谷光信前市長・谷岡暁美編集委員が、今回の市史編さん事業に再び深く関わっていることは、不思議な巡り合わせというべきか。その縁の深淵さを感じる。

（２）清水中学校教諭を退職し、「市史編さん事業」に関わる！

平成 31 年 3 月 31 日、私は臨時教員時代も含めて通算 30 年間の教職に

ピリオドを打ち、市史編さん室長兼任の市史編集委員長という重責を背負い「市史編さん事業」の矢面に立つこととなった。教職を去る一抹の寂しさと、新しい職務への未知なる挑戦に身が震えた。

中村春利先生には、郷土史同好会で活動を共にし、度々市史の改訂を依頼された。亡くなる数日前、中村先生は欠かさず出席している定例会を欠席した。定例会の会場から柳花統副会長（当時）が、中村先生に携帯電話で連絡を取ると用件の最後に「何も心配はいらないから安心してくれと田村君に伝えてほしい」との伝言があった。これが私への最期の言葉(遺言)となった。この中村先生の言葉を肝に銘じ、必死の 5 年間であった。

（３）5 年間で最も辛かった「監修・前田和男と母・田村幸子の逝去」

この 5 年間で最も辛かった思い出は、かけがえのない二人の恩人の逝去であった。令和元年 11 月 21 日夕刻、土佐清水市史監修・市史編さん委員の前田和男先生（元高知県文化財保護審議会会長）がご逝去された。先生には、『高知県歴史の道調査報告書第二集・ヘンロ道』(高知県教育委員会、2010 年)発刊の仏像調査でお世話になった。先生にお供して県内西に東に仏像調査して回ったことが今懐かしく思い出される。

先生は、『旧市史』を中心的に編さんした中山進氏の「考古」部分の相談を受け、その指導に当たった。常々「研究者ではない一公務員の立場で、中山進さんは本当によく頑張った」と話されていた。そのことから、ご生前に市史編さん委員・監修の就任をお願いしてその承諾を得ていた。

先生のご逝去は私にとって、まさに青天の霹靂であった。ご自宅を弔問し、ご遺骨とお別れした。その時、先生の娘さんより田村への遺言をお伝えいただく。「市史監修の役目を果たせずすみません。よい市史完成を期待しています」と。その温かいにお言葉に、思わず滂沱。「市史編さん事業」の見事なる完遂をご霊前にお誓い申し上げる。

翌年、令和 2 年 2 月 12 日夕刻、母・田村幸子逝去。前年（令和元年）10 月、衰弱してベッドに横たわる母に「『新土佐清水市史』の刊行まで何とか生きていてほしい」と懇願。その後、母は折に触れて口角を絞り「私には心に決めていることがある」と繰り返し私にそう伝えた。その言葉は母の、火を吐くような言葉であった。敢えて私がその意味を深く母に問うことはなかった。そこには言葉を交わさずとも通じる絆があった。母の決意は、「あなたが『新土佐清水市史』を刊行するまで私は断じて生きる、そう心に決めている」との強いメッセージにほかならない。その決意をき

っと私に伝えたかったのだ。母は遂に刊行まで生きることはなかったが、心の中ではいつも私に寄り添い、全力で応援してくれていた。私には、母がその奮闘を心から喜んでくれているように思えてならない。母の笑顔が目に浮かぶ。

（４）この５年間の奮闘…いよいよ刊行はすぐそこに！

令和元年度、生涯学習課に市史編さん室が設置され、「編さん委員会」「編集委員会」が組織化、「調査協力員」「執筆協力員」が任命され、調査・執筆活動が始まった。編さん１年目の令和元年度は、歴史資料や古写真等の収集から始まったが、市史刊行から既に 40 年近くを経ており、『旧市史』の関係資料は皆無に等しかった。また、フィルムカメラからデジタルカメラの時代になっており、残存するネガや古写真は少なく、収集できた資料は少なかった。

令和２年から４年度（編さん 2～4 年目）にかけては、①戦争遺跡、②中世山城、③中世～近世石造物、④近現代学校資料等の測量や文献調査を実施した。①では、足摺岬通称「天狗山」上に設置された呉海軍警備隊の足摺探信所の弾薬庫・レーダーのコンクリート基礎・兵舎等の測量図を作図した。②では、市内 20 城跡を踏査し、地形図を基に縄張図を作図した。加えてドローンを使用して山城の上空写真を撮影し、これに縄張図を落とした。③では、市域の中世五輪塔や近世墓標の形状や岩石の分類、分布等について調査し、これをまとめた。また、あしずり遍路道上の丁石等の道標や自然災害碑の拓本による銘文読解を行った。④では、旧大津小学校の学校資料をはじめ、市域に残存する『学校日誌』に着目して災害時や戦争中の市域の歴史やその実態について考察した。『新土佐清水市史』は、これらの調査を基として最新の知見をふんだんに取り入れた内容になっている。

（５）執筆者・調査者の皆様方のお力添えに深く感謝！

市史編集委員、市史調査協力員、市史執筆協力員、協力者等の関係者の皆様には、この５年間のお力添えに深く感謝申し上げたい。最後の最後まで執念を持って全力で調査や執筆をする皆様方から、たくさんの勇気や力をいただいた。それが今日の『新土佐清水市史』の刊行につながっている。ここで調査・執筆等でご尽力いただいた皆様の氏名を明記し、ここに永久に留めることとする。

宅間一之、東近　伸、出原恵三、吉尾　寛、大原純一、浜岡　篤、谷岡暁美、武藤　清、濱田眞尚、唐岩淳子、土井恵治、岩井拓史、今井　悟、森口夏季、吉川貴臣、新野　大、山下晃弘、木谷智史、海邉博史、森山由香里、黒川信義、先山　徹、谷川　亘、吉成承三、楠瀬慶太、髙木翔太、目良裕昭、水松啓太、尾﨑召二郎、石畑匡基、吉本工心（敬称略）。

（６）市民の「地域学の基軸書」となることを願い、祈念する！

少子高齢化・過疎化の波は、全国の農山村・漁村を覆い、これまで先人たちによって築かれてきた伝統文化を衰退させ、コロナ禍がその追い打ちをかけている。高知県歴史文化財課によるとコロナ後の土佐伝統芸能は、以前の四割程度に衰退したという。県内には、生活基盤の維持すら困難な状況になりつつある集落が多く存在している。また、国際的にはロシアのウクライナ侵攻による原油価格の値上がり、これに起因する急激な物価や公共料金の高騰は国民生活を直撃し、各所に暗い影をもたらしている。このような暗雲は、土佐清水市にも確実に覆い迫ってきている。

今こそ、「故郷に対する愛着と誇り」を胸に、この難局を市民一丸となって乗り越えていかなければならない。かつて、故郷を舞台に縦横無尽に生きてきた先人たちは、当時あった数々の試練に果敢に立ち向かい、道を切り拓いてきた。中濱万次郎しかりである。今こそ、その精神を継承し、私たちは、この難局を乗り越え、乗り越えて、次代を切り拓いていかなければならない。そのためにも郷土の歴史をしっかりと捉え、学ぶことが不可欠である。まず、先人から学ぶこと、先人の知恵を今に落とし込み、これを応用していくことが必要である。この『新土佐清水市史』が、真の「地域学の基軸書」として市民の皆様の血となり、肉となり、未来を切り拓いていくための一書となることを切に願い、これを祈念する。